

【漢検漢字文化研究奨励賞】 佳作

漢字「便」における字音と意味の関係の形成

愛知淑徳大学 非常勤講師 李 芝 賢

1 はじめに

本稿は複数の漢字音（以下「字音」）を持つ漢字が字音語素¹として用いられる際の字音と意味の関係が個別語の使用拡大により変化する現象について考察するものである。日本語における漢字は韓国や中国のようなほかの漢字使用圏同様、一定の意味を持ち、語構成要素として用いられる。ただし日本語には独自の漢字文化である訓読みというものが存在し、その影響により字音語素としての漢字の用法に影響を与える現象がしばしば見られる。その原因としては日本語における漢字の字音と意味（和語による字訓）がそれぞれ独立した現象であると同時にお互いに影響を与え合う存在でもあることがあげられよう。本稿は字音と字訓の間に生じる連動した変化を示すためのものでもある。

なお、本稿は明治期という、日本語に大きな変化が生じた時期を対象としている。明治期という時期は言語的には非常に興味深い時期であることから、多くの研究者により研究の対象とされてきた。ただ、同時期に生じた字音語素の字音の変化については取り上げられたことが多いとは言いきれず、未だ課題が残されている分野であるといえよう。

上記の目標のために本稿が対象として取り上げるのは漢字便（以下「便」）における字音ピン（以下ピン）/ベン（以下ベン）とその意味の関係の変化である。結論の先取りとなるが、同関係は明治期において行われた個別漢語の使用拡大により新しい意味が形成された結果形成されたものとみられる。なお、「便」におけるその字音と意味の関係に影響を与えた個別漢語としては「郵便」「便利」の存在が指摘される。以下、下線は全て筆者による。

2 現代日本語における「便」の字音と意味の関係

「便」は早い時期からピン/ベンの二つの字音を持つ。日本語において一つの漢字が二つ以上の字音を持つことは珍しくないが、それぞれの字音を持つ意味は必ず異なるわけではない。例えば「有」という漢字は「有利」にみるような「ユウ」、「有無」にみるような「ウ」の二つの字音を持つが、「ユウ」と「ウ」の間に意味の差が存在するとは認められない。ただ、「便」におけるピン/ベンは意味の区分を持って用いられる。ピン/ベンの持つ意味を通時的に並べると以下の引用1のようになる。

〈引用1〉 字音語素「便」（ピン/ベン）（『日本国語大辞典』、以下『日国大』）

便ピン[㊦]

①たよりをする。/先便、後便/便箋^{2/}

②通信、運輸の定まった手段。/郵便/航空便、速達便、普通便、一日二便/

- ③つごうがよい。よいついで。/ 穩便、便宜 / 便乗、便覧 / 音便、幸便 / 便船、便殿、便路 /
- 便ベン^④
- ①つごうがよい。利がある。てがる。/ 簡便、軽便、利便、便易、便益、便宜、便利 / 不便 / 方便、音便 / 便蒙、便覧 / 便計、便地、便風、便法、便門、便路、便所 /
- ②くつろぐ。やすむ。/ 便衣 / 便座、便殿、便服 /
- ③口先がうまい。/ 便巧、便佞、便辟、便言、便口 /
- ④なれる、習熟する。/ 便習、便人 /
- ⑤つうじ、べん。/ 便通、便秘 / 大小便、軟便、緑便 / 便意、便器 /

ビンの③とベンの①は両方に属する例があることから分かるように同一のものとみてよい。以下〈都合がよい〉とする。ベンの②③④は以下に示すように現代日本語における使用が比較的少ない。通時的にもベンにのみみられ、字音と意味の関係に特記すべき変化を持たないため対象から除き、次節から例を取り上げない。ベンとのみ結合するのは⑤も同様であるが、こちらは使用が多いため言及の必要がある。以下〈つうじ〉とする。ビンの①は〈たよりをする〉と、②は〈通信手段〉と称する³。

次に現代日本語における〔便〕の例を確認した。以下の〈表1〉はそれぞれ2007年10月の『朝日新聞』朝刊（『聞蔵Ⅱビジュアル』使用、以下『朝日』）と『CD-ROM版

〈表1〉『朝日』『新潮』における〔便〕の例

下線一〈都合がよい〉、四角つき一〈通信手段〉、「」つき一〈たよりをする〉。
 全て筆者による。以下同じ。

ビン	朝日	新潮	ベン	朝日	新潮	併用	朝日	新潮
郵便 ⁴	1322	137	便利	142	60	便宜	123	40
便	49	13	利便	81	/	便覧	1	4
宅配便	31	/	〈つうじ〉の例	71 ⁵	267 ⁶	便殿	/	2
定期便	31	3	不便	69	34	/	/	/
増便	24	/	便	21	6	/	/	/
便乗	15	5	簡便	3	/	/	/	/
*便箋	13	24	軽便	3	12	/	/	/
船便	3	2	方便	1	15	/	/	/
穩便	2	6	便法	/	6	/	/	/
幸便	/	3	便宜 ⁷	/	5	/	/	/
*前便	/	2	便々	/	2	/	/	/
便船	/	2	至便	/	1	/	/	/
航空便	/	1	便益	/	1	/	/	/
計	1490	198	計	391	410	計	124	46

新潮文庫の100冊』(以下『新潮』)における昭和期のタイトル55本(翻訳作品は除く。作品名省略)における「便」の例を字音により分けて示したものである。

両資料とも部分的にしか振り仮名を持たないため⁸、振り仮名の無い例の字音は小型辞書である『明鏡国語辞典』(2002、大修館書店)により判断した。同書に見出しがない例、固有名詞及びその一部(「佐川急便」)は除いた。

なお、総ルビ資料としては月刊誌『ジュニアエラ』⁹(朝日新聞出版)、NHKのニュース番組¹⁰におけるルビつき字幕を用いた。それぞれ次項の〈表2〉、〈表3〉にまとめた。〈表1〉、〈表2〉、〈表3〉の結果をみると、用いられる漢語にばらつきはあるが、ピンが〈通信手段〉に、ベンが(〈つうじ〉を除くと)〈都合がよい〉に集中することは共通する。〈都合がよい〉はピンにもみられるが、延べ語数、異なり語数ともにベンが優勢と判断される。以上を現代語における「便」の字音と意味の関係とみなして論を進める。

〈表2〉『ジュニアエラ』における「便」の例

語	振り仮名	延べ語数	語	振り仮名	延べ語数
宅配便	たくはいびん	2	便利	べんり	6
五千便	ごせんびん	1	不便	ふべん	2
郵便局	ゆうびんきょく	1			
宇宙便	うちゅうびん	1			
便数	びんすう	1			
計		6	計		8

〈表3〉ニュース番組における「便」の例

語	振り仮名	延べ語数	語	振り仮名	延べ語数
便 ¹¹	びん	25	不便	ふべん	2
欠航便	けっこうびん	2	便利	べんり	1
定期便	ていきびん	1	利便性	りべんせい	1
往復便	おうふくびん	1			
航空便	こうくうびん	1			
全便	ぜんびん	1			
計		31	計		4

3 近世期における「便」の字音と意味の関係

本稿では現代日本語における「便」の字音と意味の関係が明治期に形成されたとみる。したがってまずその前時代に当たる近世中期から後期にかけての「便」の使用状況の確認を行う。近世中期の資料としては当時の共時的な漢語の使用様相を反映する近世節用

集類、中でも項目数が多い¹²『合類節用集』（1680、国立国会図書館亀田文庫蔵本/合）『節用集大全』（1680、無窮会神習文庫蔵本/大）『書言字考節用集』（1717、国立国会図書館岡田文庫蔵本/書）を用いた。

次項の〈表4〉にその結果を示す。近世節用集は新しい文字使用層を含む当時の利用者に漢語の漢字表記を提供することを本来の機能とする。したがって〈表4〉に表れる語、特に複数の書に共通する語は当時において漢字表記の情報が必要とされたもの、つまり比較的広く用いられた語とみてよいだろう。〈表4〉の結果と前節で述べた現代日本語における〔便〕の使用状況を比べてみると、〈表4〉におけるピンには〈通信手段〉¹³の用例が見当たらず、〈都合がよい〉の用例がより多く見られることが現代日本語における使用様相と異なっていることが分かる。

〈表4〉 近世節用集類における〔便〕の例

語	振り仮名	合	大	書
便宜	ピンギ	○	○	○
便船	ピンセン	×	○	○
便路	ピンロ	×	×	○
便風	ピンフウ	×	○	×
好便	カウピン	×	○	×
幸便	カウピン	×	○	×
穩便	ヨンピン	×	×	○
不便 ¹⁴	フピン	○	○	○
*急便	キフピン	×	○	○
*後便	コウピン	×	○	○
方便	ハウベン	○	○	○
便血	ベンケツ	×	×	○
便利 ¹⁵	ベンリ	×	○	○
便毒瘡	ベンドクサウ	×	×	○
便毒	ベンドク	○	×	×

次いで次項の〈表5〉は近世後期の資料における〔便〕の例である。底本において振り仮名のない例は除き、口語資料として使用される『浮世風呂』、洒落本類、『東海道中膝栗毛』は会話文と地の文を分けて示した。

〈表5〉においては『椿説弓張月』（以下『椿』）『南總里見八犬傳』（以下『里』）以外の資料における例が少なく、はっきりとした傾向は見出しがたいが、ピンに〈通信手段〉の例がみられず、〈都合がよい〉の例が多いことは〈表4〉と一致する。〈たよりをする〉の例が比較的少ないのも同様である。ただ、ベンにおいて「便利」¹⁶と「不便」¹⁷という表4にはみられない語が現れたので、以下一部の例を示す。

例1 ちうざん ぶ あ しよく しゆんでんわう とく さんじうろくとう じゆんくわ みんかん いろは
 かくて中山無異に属して、舜天王の徳、三十六嶋に淳化し、民間にも母字を
なら 習ひて、日用の書記に便利あり（『椿』）

例2 この義は、けふ あす 今明日の事にあらず、敵の大軍推寄来つべき、おしよせ き 一兩日以前を好
 とす。しかれども刀自等、豊俊と面善らずは、か の ち 那地に到りて、ふ べん 不便なるべし
 （『里』）

また〈表4〉に「一ピン」とあった「幸便」「後便」に「一ベン」の例がみられた。
 以下に例をあげる。

例3 より そのつかひひと つめもて か きつら こうべん よ
 因て其使者、詰茂佳橋等の幸便に縁りて、復五の情願、並に再太就介の事
おむき の趣を、せうそこ 大阪犬山に消息して、くだん おんつかひふね 件の御使船を返ししかば、かならず あげ 必聞え上らるべし
 （『里』）

例4 つけ よりて隸させ給ひたる、くみこ にん いさわ とど 夥兵兩三名を、石禾に留めて、こうべん ため ぐ 後便の与に俱せず、
すべ その余は都て姫上の、おん轎子を昇せし事、（下略）（『里』）

本稿の調査の限り、当該語の字音が確定できる他の例は近世期の資料にはみつから
 ず、「一ベン」がどれほど用いられたものかは確認されない。ただ、のちの辞書類、た
 とえば〈表9〉の対象資料において「一ベン」の記述はみられず、定着に至るほど用い
 られたものではないと判断される。

〈表5〉 近世後期の資料における【便】の例

- * 対象資料一酒：『黄表紙・洒落本』所収の洒落本類（『遊子方言』『辰巳之園』（以上1770年）
 『軽井茶話道中粹語録』（1779年頃か）『卯地臭意』（1783年）『通言總籙』（1787年）『傾城
 買四十八手』（1790年）『青樓畫之世界錦之裏』（1791年）『傾城買二筋道』（1798年））、雨：
 『雨月物語』（1776年）、春：『春雨物語』（富岡本（1808年以降）、雨・春ともに『上田秋成集』
 所収）、椿：『椿説弓張月』（1807～11年）、浮：『浮世風呂』（1809～10年）、栗：『東海道中
 膝栗毛』（1802～14年）、里：『南總里見八犬傳』（1814-42年）

* 使用テキスト一里：小池藤五郎校訂『南總里見八犬伝』（岩波書店）、その他『日本古典文学
 大系』（岩波書店）

* 仮名遣いは現代仮名遣いに統一した。

語	字音	酒		雨	春	椿	浮		栗		里	計
		会	地				会	地	会	地		
便宜	びんぎ					24					246	270
便（なし） ¹⁸	びん					18					22	40
便船	びんせん					6					15	21
穩便	おんびん					2	1				11	15
便路	びんろ										11	11
不便	ふびん	1			1	12			5		46	65
不便	ふべん										80	80
方便	ほうべん		1				1				26	28
小便 ¹⁹	しょうべん	1					7		17			25
幸便	こうべん										1	1
*後便	こうべん										1	1
禁便	きんべん								1			1
便利	べんり					1						1

4 明治期における〔便〕の使用様相

4.1 ビンの使用様相

4.1.1 〈通信手段〉の使用拡大

明治期における〔便〕の使用様相は総ルビである「讀賣新聞」(明治7年(1874)創刊、以下「読売」)から確認した。まず〈表6〉はビンの使用様相である。5年置きに2ヶ月分の記事を5回調査し、「郵便」^{ひきやく}「便宜」^{つがふ}など意味的な振り仮名の例は対象外とした(〈表8〉同様)。

〈表6〉『読売』におけるビンの例²⁰

* 調査期間: ① 1874年11月2日～12月31日(M7) ② 1879年1月1日～2月28日(M12)
③ 1884年1月1日～2月29日(M17) ④ 1889年1月1日～2月28日(M22)
⑤ 1894年1月1日～2月28日(M27)

語	振り仮名	M7	M12	M17	M22	M27	計
郵便 ²¹	いうびん	24	12	19	47	24	126
便宜	びんぎ		2	4	2	3	11
便船	びんせん		1	3	1	2	7
穩便	をんびん		1	1	1	2	5
便	びん				1	2	3
*今便	こんびん		2				2
*次便	じびん		1				1
*急便	きふびん				1		1

まず前時代にはみられなかった「郵便」「便」がみられることが指摘される。これらは〈通信手段〉の例とみることができる。〈通信手段〉の使用拡大は明治期におけるビンの使用様相の主な変化であるが、〈通信手段〉は〈たよりをする〉と同一の語構造・類似した意味を持つため、両者の区分が困難な場合がある。和語「たより」との関係が一つの区分基準となろう。鄭萍(1991) p. 100は中国語の〔便〕は〈たよりをする〉の用法を持たないとし、日本語における〈たよりをする〉が「たより」との交流により形成されたことをその原因としてあげる。

『日国大』によると「たより」の用法は大きく「助けや、よすがとなるもの」(以下〈助け〉)と「連絡、通信などを伝えるもの」(以下〈使者〉)に分けられる。「たより」が〔便〕の字訓に用いられたのは〈助け〉と〈都合がよい〉が意味面で相通しているためであろう。一方、〈たよりをする〉は森岡健二(1969)にみる和語の字音読みによる字音語素の形成、つまり「音訓流通」により〈使者〉から生じたものとみられる。〈たよりをする〉に〈使者〉の異形態としての機能がみられるのもそのためであろう²²。『日葡辞書』において〈たよりをする〉の意味を持つ〔便〕の例を「一のたより」と同意とし、〈使者〉と解釈するのもその一例としてとらえることができる。例えば「急便(Qiûbin)」は「急ぎのたより(Isoguinotayori)」であり、「急ぎの文書送達使、あるいは使者(訳)」とある。

しかし〈通信手段〉は「たより」との言いかえはできない。例えば同じく「後便」の形でも、前掲の例4は「後のたより」と言いかえることができるが、以下の例5はできない。

例5 出発のベルが鳴ったとき、1人の女学生が大きなリュックとともに、大きなボタンを針金につなぎ2個ずつ振り分けに担ぎ、泣きながら走ってきた。線路を飛び越えて、間に合わせようと急いだが間に合わなかった。結局、引率の先生と後便で行くことになった。(「朝日」、2009年9月24日)

そして〈表6〉における「便」は以下に一部の例を示すように「一のたより」と言いかえることはできず、〈通信手段〉と認められる(以下「読売」の例仮名遣い原文のまま。旧字体は現行の字体に修正。筆者による)。

例6 (前略) 干肉、干皮杯と携へ大有丸便にて沖繩那覇港に入りしが…(中略) 去る八日の球陽丸便にて熊本へ帰国し(下略)(明治27年(1894)1月26日)

ただ、〈たよりをする〉と〈通信手段〉が持つ類似性は、特に〈使者〉により〈たよりをする〉ことがすなわち〈通信手段〉であった近世期の通信制度における両者の線引きを難しくする。実際飛脚制度で用いられた「定便」「御用便」などは〈たよりをする〉の例ではあるが、〈通信手段〉としてとらえることもできる。

〔便〕における〈通信手段〉の発生が〈たよりをする〉の発生より後のことであるのは確かであるが、その正確な形成時期の特定は上記の理由から困難である。ただ3節で述べたように明治期以前の「一ピン」構造の例は多いとは言えず、〈通信手段〉が本格的に使用されたのは明治期に入ってからのものであるとみられる。その定着は〈たよりをする〉が持つ「一ピン」構造が近代化された通信・運輸制度に関わる造語のための軸字(詳細は鈴木英夫(1978))として使用されたことにより行われたと推測される。〈表6〉以外にみる明治期の例を一部あげる。

例7 昨七日イ便の葉書にて(飯田町局消印)美人クリイムの語にフェアクリイム或はベルクリイムの傍訓有度との言を貽られし読者あり。(明治30年(1897)9月8日4面)

例8 荷物は通運便にて先へたゝせれば残るは身一つに軽々しき桂次、今日も明日もと友達のもとを馳せめぐりて何やらん用事はあるものなり(下略)(樋口一葉、『ゆく雲』、明治28年(1895))²³

4.1.2 新制度の名称にみる〈通信手段〉とピンの関係の定着

〈表6〉にみられる「一ピン」の例は僅かであるが、「郵便」の延べ語数は目だって多い。明治初期における〈通信手段〉の使用拡大には新式通信制度(以下「新制度」)の名称に「一ピン」構造が用いられたこと、つまり「郵便」という制度名の採択が大きな影響を与えたと思われる。「郵便」は近世後期から書簡を中心に例がみられるが²⁴、広く使用され

たのは明治4年(1871)新制度の名称として採択された以降のことである。慶応年間・明治期の漢語辞書(『明治期漢語辞書大系』所収のもの)においても明治4年までは「郵便」の例がみられない。それ以降の例は〈表7〉にまとめた(明治8年(1875)以降は「一ペン」が定着したので省略)。

〈表7〉『明治期漢語辞書大系』収録書における「郵便」記述

資料名	仮名表記	意味記述
『大全漢語解』(明治4年)	イウベン	シュクツギノタヨリ
『布令字辨』第6篇(明治5年2月)	イウビン	シュクツギノタヨリ
『増補布令字辨』(明治5年冬)	イウベン	シュクツギノタヨリ
『漢語続貂』(明治6年)	ゆうべん	ハヤタヨリ
『世界節用無尽蔵』(明治6年)	いふべん	つぎのたより
『漢語二重字引』(明治6年)	イウビン	シュクツギダヨリ
『漢語類苑大成』(明治6年)	イウベン	ハヤビキヤク
『布令必用大增補新撰字引』(明治7年)	イウビン	シュクツギタヨリ
『新撰字解』(明治7年)	イウビン	シュクツギタヨリ
『漢語集』(明治8年)	イウベン	ハヤビキヤク

前島密により発案された「郵便報知新聞」には創刊年である明治5年(1872)に「郵便」の例がみられ、当初から正しいのは「一ペン」だったと判断される。しかし〈表7〉には『布令字辨』の「一ペン」がその増補本である『増補布令字辨』において「一ベン」に直されるなど、一過性とは思われない「一ベン」の例が複数の資料にみられる。これについては近世期の「郵便」が広く知られた語ではないことを理由とすることもできよう。しかし〈表7〉における「郵便」はその意味記述から〈たよりをする〉の例であることが明らかであり、結局は〈たよりをする〉とピンの関係に起因する混用例と解釈される。

〈表4〉、更にその前時代の主な辞書類においても〈たよりをする〉の例は例外なく「一ペン」とあり、「一ベン」とした例は本稿の調査の限りみられない。辞書類の記述を信頼すれば、〈たよりをする〉とピンの間には明治期以前から結合関係が認められる。しかし3節にみたように近世期における〈たよりをする〉の異なり語数は比較的少なく、それぞれの延べ語数も多いとはいいがたい²⁵。つまり、近世期における〈たよりをする〉の使用は活発とは言えず、〈たよりをする〉とピンの関係は安定したものではなかったと考えられる。「読売」にみられる〈通信手段〉の例に以下のような「一ベン」の例がみられるのも同様の理由から理解される²⁶。

例9 (前略) こんどいよいよ 今度愈よじひもつ 自費きたを以て来る十七日発のはつ近江丸便おうみまるべんにて渡航の事とかうに決しこと(下略) (明治22年(1889)2月8日3面)

明治期における「郵便」の語義は新制度が定着するにつれ、〈表7〉にみる「シユクツギダヨリ」から「信書その他の物件を集配・伝達する通信業務や制度」（『日国大』）という今日の語義に近いものへと変化していくと推測される。このような「郵便」の語義変化からは〈たよりをする〉と〈通信手段〉が連なるものであることが再び示される。従って〈通信手段〉が〈たよりをする〉と結合関係を持つピンをとるのは自然な流れといえる。ただし明治期における〈通信手段〉が広く用いられたものであったため、ピンとの関係もより安定したものになったと思われる。〈通信手段〉におけるピン/ベンとの混用がいずれも一時的なものに止まり、現代日本語における混用例がみられないことから同様のことが指摘される。

4.2 ベンにおける〈都合がよい〉の例の使用拡大

次に〈表8〉からベンの使用様相をみる。明治7年には〈つうじ〉以外の例は「便利」のみがみられるが、時代とともに〈都合がよい〉の例が増加する。〈表6〉と合わせて考えると明治期の〈都合がよい〉におけるベンの割合が前時代に比べ大きいことが示される。

〈表8〉『読売』におけるベンの例

語	振り仮名	M7	M12	M17	M22	M27	計
便利	べんり	3	2	12	19	17	53
不便	ふべん		1	11	10	12	34
便	べん		2	1	10	21	34
小便	せうべん	12	6	1	1	1	21
便所	べんじょ		4	3	2	5	14
便益	べんえき			5	3		8
軽便	けいべん			1	1	3	5
便否	べんひ(び)		1	1	1	1	4
簡便	かんべん			2	2		4
利便	りべん					4	4
便法	べんぽふ				1	2	3
便宜	べんぎ			2		1	3
便覧	べんらん			1	1		2
方便	ほうべん			1	1		2
至便	しべん				1	1	2
大便	だいべん	1		1			2
便 ²⁷	べん		1				1
便用	べんよう			1			1
便 ²⁸	べん				1		1

その原因として特に注目したいのが比較的多くの延べ語数を持ち、〈都合がよい〉に近い語義を持つ個別語、つまり「便利」「不便」「便」の使用拡大である。これら3語は共に近世後期以降から用いられたものであり、「便利」を中心に連動した使用拡大の様相を見せる。

まず「便利」は近世後期までは主に〈つうじ〉として用いられた（田島優（1998）p.193）が、『漢語大詞典』によると中国語においては通時的に①すばやい②便利である③便利にさせる④慣れる⑤大小便をする⑥大小便（以上『漢語大詞典』の記述を筆者が訳し、まとめたもの。例は省略した）の意味を持つ。同書は〈都合がよい〉と連なる②に『墨子』『史記』『漢書』、③に『漢書』の例をあげる（⑤に『漢書』『太平広記』、⑥に清時代の『聖武記』の例がみられる）。つまり、「便利」は本来多義語であるが、近世後期までの日本語においては〈つうじ〉を中心として、それ以降は〈都合がよい〉として用いられたといえよう²⁹。なお、以下本稿の「便利」は〈都合がよい〉の意を持つものを指す。

明治期を前後して「便利」が広まった理由としては、まず「便利」が近世後期から明治初期における啓蒙書に多くみられ³⁰、新学問のため習得する必要があったことがあげられる。また、訳語としての使用も影響している。例えば『英和对訳袖珍辞書』（文久元年（1862））『和英語林集成』初版における「convenient」「convenience」「commodious」は「便利（ナル）」と訳される。

佐藤亨（1983）によると中国の地理学翻訳書である『職方外紀』（元和9年（1623））、その影響が指摘される日本の『改正増訳采覧異言』（享和3年（1803））に「便利」の例がみられる。同書に指摘があるように『職方外紀』は日本の漢語へ影響を与えており、『職方外紀』の例が「便利」の用法変化のきっかけとなった可能性もあろう。ただ、近代英華字典類、例えば『英華字典』（1866～69）における「convenient」「commodious」は「便宜（的）/便当的/利便（的）/順便/便合/方便者」とされ、「便利」の使用はみられない。他の辞書類においても概ね同じであり³¹、訳語としての定着は日本の方が先であったと思われる。また、上記の英華字典類には「convenient」などに「便宜」がみられる³²が、『英和对訳袖珍辞書』『和英語林集成』や『英華和訳字典』（明治12年（1879））などの近代英和辞書類、なお今日の英和辞書を参照しても同語に「便宜」が使用された例はみられない。その理由は定かではないが、既存語の「便宜」が訳語として使用されなかったことも「便利」の普及につながったと思われる。

次に「不便」は『和英語林集成』第3版（明治19年（1886））にみられる「fubenri フベンリ 不便利」「fuben フベン 不便」が共に「inconvenient」とあり、「不便利」=「不便」の関係が認められる³³。以下の例10にも同様のことが示されており、「便利」の反義語として登場したものとみてよからう。

例10 不便利に慣るゝ勿れ

よ 世には日常の不便不利を些細なることとして（中略）たとへ注意したりとて、
不便も慣れては多く不便を感せざるものゝ如く（下略）（『読売』、明治43年
（1910）8月24日）

ただし、「不便フベン」の語形は中世期の「便当ペントウ」³⁴の反義語にもみられる。「便当」は本義から派生した「裕福」の意味を持っており、その反義語である中世期の「不便」にも「貧乏」の意がみられる。中世期の「不便」は後に「不弁」などへと表記が変化しており、「便利」の反義語として登場した「不便＝不便利」との連続性は希薄と考えられる。なお、近世期以降の「不便」に「貧乏」の意味が現れた例も本稿の調査の限りではみられず、両者が連なるものとは言いがたい。

最後に「便ベン」についてみる。〈表8〉からの例を一部あげると以下のようなものである。

- 例 11 ^{もっば}専ら^{ちやうそんせい}町村制のみ^{けんきう}研究する者の^{もの}便^{べん}を^{はか}謀り^{これ}之と^{せいがい}精解し(下略)(明治22年(1889)1月5日)
- 例 12 ^{またしり}亦私立^{りつくわいしゃ}会社^ての^{にん}手に一任すると^{もつ}以て^{べん}便なりとする(同1月22日)
- 例 13 ^{こと}殊に^と利根川^{ごうずみ}の^{ないかい}洪水と^{はな}内海に^{べん}放つ^えの^{おうりうぼういつ}便を得て^{ゆる}横流^{ため}傍溢と許さざるが^{ため}為に(明治27年(1894)1月9日)

「便」は〈表8〉においては明治12年(1879)からみられるが、本稿の調査の限り、明治期以前の「便」に同用法はみられない。なお、「便ある」「便なる」「便を得る」などの一般的な用法はもちろん、「便を謀る」「交通の便」などコロケーションともいえる用法においても「便利」に同用法がみられ、「便利」の略として用いられたと推測される。

一方、〈表8〉にみられる他の〈都合がよい〉の例、つまり「簡便」「軽便」「便覧」「便用」「便否」「至便」「便益」「便法」「利便」を『和英語林集成』3版、『漢英対照いろは辞典』(明治20年(1888))、『言海』(明治22年(1889))から確認すると「簡便」「軽便」以外は項目がみられない。その多くが明治期に入ってから本格的に使用されたと思われる。ただ近世期における[便]の使用様相からして、〈都合がよい〉の例の字音が全てベンになることは不自然であり、明治期に入り〈都合がよい〉にベンをとる傾向が生じたと考えられる。

その原因として上記の「便」の影響が指摘される。『和英語林集成』初版(慶応3年(1867))は「convenient」を「Benri; tszgo; katte; tszide; choho」とするが、「convenient」を〈都合がよい〉と同意とみるなら、「便利」は〈都合がよい〉に極めて近い語義を持つ。そして上述したように「便」は「便利」、つまり〈都合がよい〉の略としての意味を持ち、字音語素としてのベンとは同形である。同形語が〈都合がよい〉に非常に近い語義を持ったことはベンと〈都合がよい〉が結合しやすくなる傾向をもたらしたと推測される。〈都合がよい〉とベンの関係において軸字の使用はみられないが、「一ピン」のように音訓流通により形成され、いわゆる和製漢語の造語に適したものではなかったためであるといえよう。

4.3 〈都合がよい〉の既存例における字音変化

「便宜」は〈表4〉、〈表5〉のように近世期においてはほとんど「ピンギ」と読まれた³⁵。しかし〈表8〉においては「ピンギ」よりは少ないが「ベンギ」の例がみられる。現代語においてはいずれも認められるが、〈表1〉における「新潮」のパラルビ作品が持つ「便宜」の振り仮名は全て「ベンギ」であり、規範は「ベンギ」であると思われる。

次項の〈表9〉は明治期の辞書類にみられる「便宜」の記述をまとめたものである。今日においては規範とされる「ベンギ」であるが、『言海』に「ベンギ」がみられるが、同年刊行の『和英語林集成』3版にはないなど、明治期においてはまだ完全に定着していない様子がみられる。明治期に「ベンギ」が一般化した理由としては「便宜」(『読売』、明治8(1875)年3月7日)にみるように「便宜」の語義が「便利」、即ち〈都合がよい〉と類似した³⁶ものであることが指摘される。上述したように明治期における〈都合がよい〉はベンに傾いており、そのため「便宜」が持つ〈都合がよい〉に類似した語義により、その語義と結合しやすい「ベン」へと字音変化したと推測される。

早い時期から〈都合がよい〉はピン/ベンに共通して用いられたが、個別語の中で併用が認められた例は本稿の調査の限り明治期以前はみられない。「便宜」同様明治期を境にピン→併用へと字音変化した例としては「便路」「便風」もあげられるが、いずれも〈都合がよい〉の例である。明治期は「便」の字音と意味の関係が変化した時期であり、〈都合がよい〉にベンを取りやすい傾向が生じたのもその変化の一つである。その影響により個別語に語義による字音変化が生じたとみることができる。

〈表9〉 明治期の辞書類に見られる「便宜」の記述

『和英語林集成』 (初版慶応3年、2版明治5年、3版明治19年)	BINGI <u>ビンギ</u> 便宜 n.opportunity、convenient way or time(全版)、 message、tidings、word(再版以降)
『附音挿図英和字彙』 (明治6年)	Opportunity <small>キクワイ</small> <u>機会</u> 、 <u>便宜</u> 、 <small>チャウド</small> <small>キキ</small> 恰好ノ時
『漢英対照いろは辞典』 (明治21~2年)	<u>びんぎ</u> よきたより；ついで Convenience <u>べんぎ</u> たよりよき；つがふ convenient；convenience、opportunity
『言海』 (明治22年)	<u>びんぎ</u> タヨリヨロシキコト <u>べんぎ</u> 便宜(びんぎ)ニ同ジ

5 まとめ

明治期は周知のとおり、日本語の語数、特に漢語の数が著しく増加した時期である。なお、用法の変化による既存語の語義変化も指摘される。同時期における「便」は「一ピン」構造における〈通信手段〉の定着や、〈都合がよい〉におけるベンの使用拡大により、前時代のものとは大きく異なる使用様相を持つ。それぞれの変化には個別語の使用拡大が影響を与えているが、まず〈通信手段〉の定着には〈たよりをする〉の持つ「一ピン」構造が「郵便」をはじめとする明治期の近代化した通信制度の名称に用いられたことが影響を与えている。一方、〈都合がよい〉におけるベンの使用拡大は「便利」やその反義語である「不便」、その略としての「便」などの〈都合がよい〉に近い語義を持つ語の使用拡大に裏付けられている。本稿は個別語の確立、及び使用増加が漢字の字

音と意味の対応関係に大きく影響した事例を提示すると共に、複数の字音による意味分担の仕組みの理解につながるものとして位置づけられる。なお、〈通信手段〉の定着は通信制度の近代化という社会的変化により行われており、言語外の原因が言語現象を引き起こした一例としてとらえることができると思われる。

最後に字音語素にみられる字音と意味の関係という問題における今後の見通しを簡略に述べておきたい。日本語においては一つの漢字が（漢音、呉音、唐音などにより）複数の字音を持つことが一般的であるが、基本的には一字一音である韓国語や中国語においては同様の現象はみられない。日本語の一字多音の特長により生じたとみられる字音による意味区分の事例を紹介した先行研究があるので、以下引用しておく。

「人（ニン）」と「人（ジン）」という字音語基は、種々の語基と結合して、多数の複合語をつくりだす。いま、二字漢語の構成要素となるばあいをのぞいて、語または語基の後部分として結合するばあいのみを問題にすると、つぎのような例がえられる。

- 一人（ニン）…案内一・管理一・見物一・支配一・使用一・通行一・貧乏一・
保証一・料理一
- 一人（ジン）…外国一・財界一・自由一・社会一・知識一・文化一・民間一・
野蛮一・有名一

このニンとジンの語彙的な意味の差は、まずないとみられる。しかし、語形成上の能力では、この両者には、はっきりした差異がみられるのである。新聞の調査（李注-国立国語研究所報告 56『現代新聞の漢字』秀英出版、1967年、pp. 62-63）に出現した、このような、接辞的な用法をもつ「人」は、「人」という漢字の全使用数約 8800 例のうち、約 3000 例をしめす。（そのうち、数詞につくものが 2400 例である。）それについてしらべてみると、つぎのようなことがわかる。

- ① ニンは和語とも結合するが、ジンは結合しない。
- ② ニンは用言類の語基としか結合せず、ジンは体言類および相言類の語基としか結合しない。
- ③ ニンと結合する語基はすべて〈動作〉をあらわし、ジンと結合する語基は、〈場所〉・〈時〉・〈活動〉・〈精神〉をあらわす語基および相言類の〈状態〉を表す語基としか結合しない。
- ④ ニンは〈数詞〉と結合し、ジンは〈地名〉と結合する。その逆はない。

みぎの事実は、1、2の例外（たとえば「読書一人」「暇一人」など）をのぞいて、明確に実証される。また、二字漢語の後部分となる「人」にも、このような傾向はあるが、これほど、はっきりした対立はない。いわば、接辞的にもちいられる「人（ニン）」と「人（ジン）」には、造語法のうえで、相補的な関係にあるわけである。（野村雅昭（1977）、pp. 271-272）

以上の野村（1977）が取り上げている〔人〕は日本語においてのみ複数の字音を持つ例であり、今回対象とした〔便〕とはやや事情が異なる。〔便〕は『広韻』の記述からも分かるようにその祖系音（中国字音）、及びそれを受け入れた韓国字音においても二つの字音を持つ（ただし、日本語において〔便〕が持つ字音の詳細、及び字音による意味区分の様相は他の言語にみられるものとはやや異なる、独特なものである。その原

因としては字音ビンの性質が未だ究明されていないことがあげられるがこの問題に関しては稿を改めて論じたい。

それぞれの字音の発生過程はもちろん無視することはできないが、本稿が扱った〔便〕と野村（1977）が取り上げた〔人〕、及び同様のことを反映するほかの例は日本語の中で発生した字音による意味の区分という同じ言語現象として扱われるべきものであるとみられる。祖系音においてはみられない字音による意味区分が日本語の中で発生し、定着するという現象は非常に興味深いものであるといえよう。ただし、それぞれの事例が発生した時期および発生過程が一定したものであるとは想定できないため、実証的な研究方法が求められよう。つまり、字音語素における字音と意味関係の形成という現象がある程度体系的にとらえるためにはより多くの事例の検討が必要であるといえる。今後の課題としたい。

注釈

- 1 字音語（漢語）の造語要素の機能を持つものを指す。
- 2 中国語における「便箋」は〈都合がよい〉の例とされる（鄭萍（1991）p. 99）。ただ、日本語における語義から〈都合がよい〉とは見なしがたく、本稿では『日国大』同様〈たよりをする〉とするが、後述する音訓流通により形成された「一ビン」構造を持つ例とは区分して考える必要がある。
- 3 〈通信手段〉と〈たよりをする〉は語形のみでは区別が困難な場合があるが、〈表1〉から〈表3〉の分類は用法を確認した上で行ったものである。
- 4 「郵便番号」「郵便はがき」など合成語の例は「郵便」に統一。〈表6〉同じ。
- 5 異なり語数 13 一便秘、便、小便、便座、検便、血便、軟便、便器、便所、快便、排便、ふん便、便意。
- 6 異なり語数 13 一小便、大便、便器、用便、血便、検便、便秘、排便、糞便、便、便意、便所、便通。
- 7 振り仮名を有する例。
- 8 『新潮』はパラピの作品を一部含む。『朝日』は難読語に振り仮名がつく例がある（「便箋（びんせん）」など）。
- 9 時事問題を主に扱う。対象は 2009 年 11 月号～2010 年 4 月号の 5 冊（デジタル版）。
- 10 『NHK 手話ニュース』『NHK 手話ニュース 845』『こども手話ウイークリー』『週間手話ニュース』。2010 年 4 月 1 日から 25 日までの放送分。
- 11 「数字+便」9 例、「一行きの便」5 例、「空の便」4 例、「地名+便」2 例、そのほか（「お昼の便」など）6 例。
- 12 高梨信博（2004）「和漢音釈書言字考節用集」『日本語学』23（12）pp. 231～241。近世節用集の性格についても同書を参照。
- 13 記述上の便宜のため、文脈を持たない〈表4〉の「一ビン」の例は〈たよりをする〉と処理した。
- 14 派生義の「かわいそうだ」のみが残ったため〈都合がよい〉とみなさない。詳細は田島優（1998）。「フビン」の表記変化の詳細についても同書参照。同変化については字音の変化ではないため、本稿では触れない。表記変化した「フビンー不愆/不憫」も〔便〕の例で

はないため対象とはしない。

- 15 いずれも「肢体門」にみられたため、〈つうじ〉の例とみなした。
- 16 『里』にも〈都合がよい〉の用法を持つ「便利」が13例あるが、振り仮名がないため対象外とした。
- 17 田島優(1998)によると中世期の「不便」は「貧乏」の意味も持つが、『里』の「不便」には「貧乏」の用法はみられない。
- 18 全例「びんなし」(及びその活用形)の形であるため、切り離さず対象とした。「びんなし」は「かわいそうだ」の意味もあるが、表5では殆どが「都合が悪い」と解釈されたため〈都合がよい〉とみなした。
- 19 「寝小便」「小便所」など合成語の例を含む。〈表8〉同じ。
- 20 「不便フピン」が全期間合わせ17例みられたが、既に「不憫/不愍」と併用されていたため、対象から除いた。
- 21 「郵便」は明治初期において〈たよりをする〉から〈通信手段〉へと語義変化しており、〈表7〉にみるようにまだ〈通信手段〉の例と見なしきれない部分がある。しかし、記述上の便宜のため、本稿では新制度名となった以降の例は一貫して〈通信手段〉と処理した。
- 22 「修理殿飛脚便りニ返翰ながら進上仕候」(元禄7年(1694)正月)、「先日李由僧飛脚便ニ膳所迄御芳墨相達し、其後御左右も不承候」(元禄7年(1694)6月15日附、いずれも松尾芭蕉の書簡(『芭蕉文集』(『日本古典文学大系』)所収)のように一つの資料の中に「飛脚便」「飛脚便り」が同時にみられるのもその例といえよう。
- 23 ルビは『ゆく雲』が発表された雑誌「太陽」第1巻第5号から確認した。
- 24 具体例は李芝賢(2006)参照。
- 25 参考までに近世初期の『西鶴集』『黄表紙 洒落本』(いずれも『日本古典文学大系』所収)、および近世全期にわたる『断本大系』(東京堂出版)を調べてみたが、『断本大系』に「書簡」の意味として用いられた「便宜」の例がみられたのみである。
- 26 『日国大』において「汽船便」に「きせんびん」「きせんべん」(いずれも「ある両地間に定期的に利用される汽船の運行」)の両方が認められているのも一例。
- 27 〈つうじ〉の例。
- 28 例9に用いられたもの。
- 29 『日国大』には比較的早い時期の〈都合がよい〉の例もみられるが、田島優(1998) p. 193に『書言字考節用集』において「肢体門」だった「便利」が『蘭例節用集』(文化12年(1815))においては「言辞門」に移ったとあるように、その共時的な用法が〈都合がよい〉に移るのは近世後期であるとみるべきであろう。
- 30 田島優(1998) p. 196の例を参照。
- 31 ただ『英華和訳字典』(明治12年(1879))には「convenient」の中国語訳に「便利」が見られる。しかし他の類義語には「便利」が見られず、中国語における使用を反映したものとは断言できない。同書の日本語訳における「convenient」及びその類義語にはいずれにも「便利」が用いられており、その影響も考えられる。
- 32 本稿では訳語の変化には深入りしないが、現代中国語における同語は「便宜」ではなく「便利(的)」などと訳される。
- 33 田島優(1998) p. 177も参照。

- 34 その成立ちは鈴木博（1972）、表記・および意味の変化、反義語としての中世期の「不便」については田島優（1998）参照。
- 35 『日国大』における「ベンギ」には1700年代の例もあるが、その数から「ピンギ」と併用されたとは言いがたい。なお、同書における『六如庵詩鈔』からの例は字音が確認されておらず確例ではない。
- 36 通時的には「書簡」の意味も持つが、〈表9〉にみるように明治期以降広く用いられたものではない。

参考・引用文献

- 李芝賢（2006）「郵便考」『名古屋大学国語国文学』98 pp. 91-122
- 佐藤亨（1983）『近世語彙の研究』桜楓社 第3・4・9章
- 鈴木博（1972）『周易抄の国語学的研究』研究篇 清文堂出版 pp. 175-181
- 鈴木英夫（1978）「幕末明治期における新漢語の造語法」『国語と国文学』55-5 pp. 148-158
- 田島優（1998）「「不便」考」『近代漢字表記語の研究』和泉書院 pp. 173-198
- 鄭萍（1991）「漢語「便宜」について—和漢語彙の交流の観点を中心に—」『国語語彙史の研究』12 和泉書院 pp. 83-102
- 野村雅昭（1977）「造語法」『岩波講座 日本語9 語彙と意味』岩波書店 pp. 247-284
- 森岡健二（1969）『近代語の成立 明治期語彙編』明治書院 pp. 306-310

資料・用例出典（成立年度順）

- 日本イエズス会（1603-4）『日葡辞書』/『邦訳日葡辞書』（1980、岩波書店）使用
- 堀達之助（1862）『英和对訳袖珍辞書』/『江戸時代翻訳日本語辞典』（1981、早稲田大学出版部）使用
- ロブシャイド（1866-9）『英華字典』/アビリティ社によるCD-ROM復刻版使用
- 中村敬字校正（1879）『英華和訳字典』/大空社（1998）使用
- 大槻文彦（1886）『言海』/筑摩書房（2004）使用
- 高橋五郎（1888-9）『いろは辞典：漢英対照』/大空社（1997）使用
- 『日本古典文学大系』（1957-69）岩波書店/検索に国文学研究資料館の本文データベース使用
- 中田祝夫・小林祥次郎（1973）『書言字考節用集研究並びに索引』風間書房
- 中田祝夫（1975）『恵空編節用集大全研究並びに索引』勉誠社
- 中田祝夫・小林祥次郎（1979）『合類節用集研究並びに索引』勉誠社
- 小池藤五郎校訂（1984-5）『南総里見八犬伝』岩波書店
- 松井栄一篇（1995-6）『明治期漢語辞書大系』大空社
- 漢語大詞典編輯委員會（1986-94）『漢語大詞典』上海辭書出版社
- 『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』（1995）新潮社
- 『明治の読売新聞』（1999-2002）読売新聞社メディア企画局データベース部
- 飛田良文・李漢燮編（2000-1）『和英語林集成：初版再版三版対照総索引』港の人
- 『日本国語大辞典』第2版（2000-2）小学館
- 『明鏡国語辞典』（2002）大修館書店

付記：本稿は『日本語の研究』243号に掲載された同タイトルの論文を一部修正（表現、表の構成など）したものであります。なお、2009年度に提出された筆者の学位申請論文の一章を大幅に修正したものでもあります。